

- 大型の斑点米カメムシが多発。品質低下の主な原因是昨年に引き続きカメムシによる着色。
- 登熟期間中の高温による品質への影響は限定的。
- 1等米比率は84.5% (JAみやぎ仙南、令和7年12月11日現在)

※県全体: 93.4% (令和7年10月31日現在)

1 気象経過 (丸森アメダス、令和7年4月1日～10月31日)

4月から7月にかけてかなりの高温(平年+約2.3°C)、少雨(平年比約87%)、多照(平年比約120%)で推移しました。特に気温に関しては、記録的高温年であった令和5年度並で推移しました。東北南部の梅雨入りは6月23日頃、梅雨明けは7月18日頃となりました。

8月はかなりの高温となり(平年+約2.5°C)、降水量は少なくなりました(平年比約78%)。

9月もかなりの高温となり(平年+約2.6°C)、上旬から中旬にかけて降雨がありました。

10月は平年並～やや高温で推移し(平年+約0.6°C)、降水量は平年並(平年比約102%)、日照時間は少なくなりました(平年比約84%)。

気象経過 (R7/4/1～10/31)

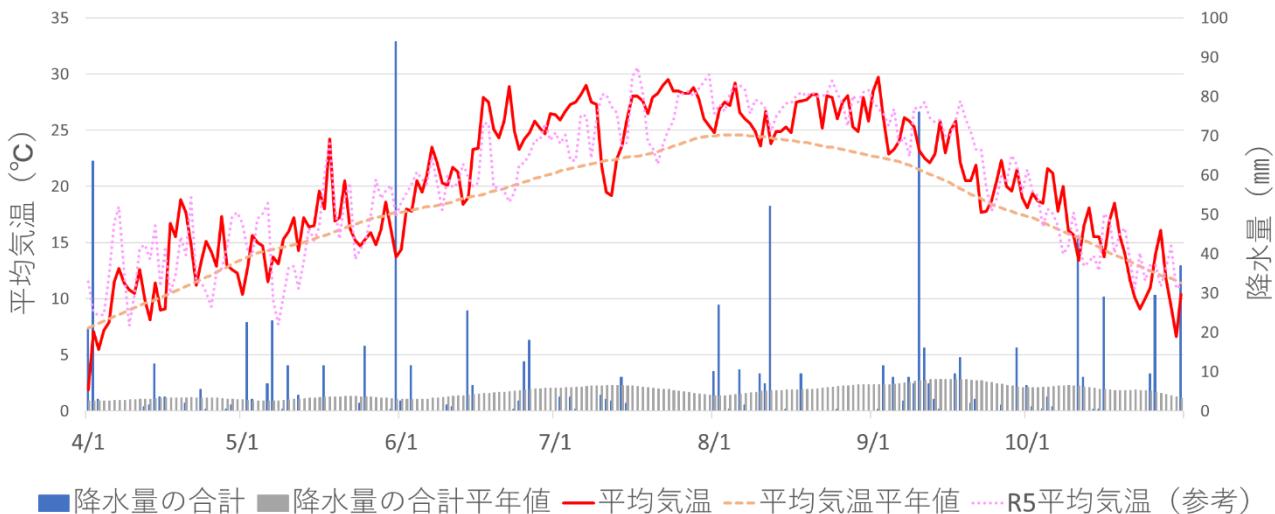


図1 気象経過 (丸森アメダス、令和7年4月1日～10月31日)

2 管内の生育経過

【田植期】

- 仙南地域の田植盛期は5月13日（平年差+1日）。（表1）

表1 田植時期

	田植始期	田植盛期	田植終期
本年	5月4日	5月13日	5月27日
前年	5月4日	5月15日	5月29日
平年	5月4日	5月12日	5月25日
平年差	同日	1日遅い	2日遅い

注1) 田植始期、盛期、終期は、水稻作付見込面積に対して、田植実施面積がそれぞれ5%、50%、95%以上となった日。

注2) 平年値は令和2年から令和6年までの5か年平均。

【出穂期】

- 仙南地域の出穂盛期は7月28日（平年差-2日）。（表2）
- 生育期間中の高温多照傾向により生育が早く進展し、出穂が早まりました。

表2 出穂時期

	出穂始期	出穂盛期	出穂終期
本年	7月22日	7月28日	8月4日
前年	7月20日	7月26日	8月7日
平年	7月25日	7月30日	8月9日
平年差	3日早い	2日早い	5日早い

注1) 出穂始期、盛期、終期は、水稻作付見込面積に対して、それぞれ5%、50%、95%以上が出穂期に達した日。

注2) 平年値は令和2年から令和6年までの5か年平均。

【刈取期】

- 仙南地域の刈取盛期は9月24日（平年差-4日）。（表3）
- 出穂が早かったことや登熟期間が高温で推移したことから成熟が早まり、刈取時期が早くなりました。
しかし、大規模経営体を中心に刈取作業が10月中旬まで継続したことから、その後の刈取進捗は鈍化して刈取終期は平年並となりました。

表3 刈取時期

	刈取始期	刈取盛期	刈取終期
本年	9月10日	9月24日	10月15日
前年	9月8日	9月29日	10月14日
平年	9月13日	9月28日	10月14日
平年差	3日早い	4日早い	1日遅い

注1) 刈取始期、盛期、終期は、水稻作付見込面積に対して、それぞれ5%、50%、95%以上の刈取が進行した日。

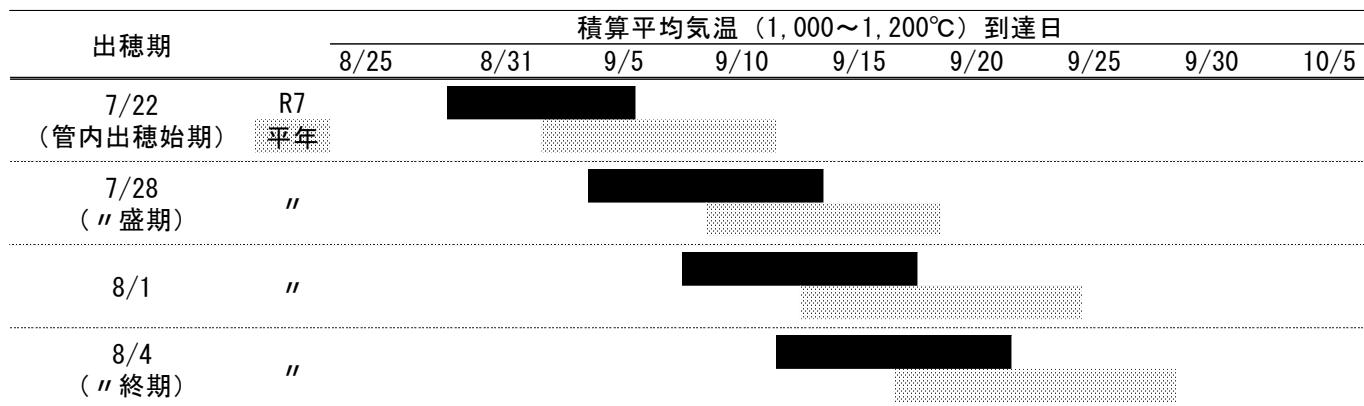
注2) 平年値は令和2年から令和6年までの5か年平均。

【参考】令和7年度の刈取適期

令和5～6年度と同様に、今年度も出穂後に高温が続いたため、管内全体で成熟が早まりました。管内の出穂盛期である7/28に出穂した場合の刈取適期※（出穂後の積算平均気温が1,000～1,200°Cと仮定）は、9/4～9/13の期間であったと推測され、平年よりも5日程度刈取適期が早くなつたことになります。

※刈取適期に達する積算平均気温は、品種によって異なります。

例：「ひとめぼれ」…940～1,100°C 「つや姫」…1,000～1,200°C



※丸森アメダスデータより作成

図2 出穂期別の刈取適期の目安（丸森アメダス）

【参考】「仙南稻作情報」における刈取適期予測の精度

令和7年8月14日発行の「令和7年度仙南稻作情報（第6号）」において、気象庁の1カ月気温確率予測データ等を用いて出穂期毎（7/15, 20, 25, 30, 8/4, 9）の積算平均気温（940°C～1,200°C）到達日の予測を行つた結果、非常に高い精度（同日または+1日）で予測を行うことができました。

表4 出穂後の積算平均気温と出穂期毎の積算平均気温到達日の予測（仙南稻作情報（第6号））

地帯	積算平均気温 (°C)	出穂期						備考
		7月15日	7月20日	7月25日	7月30日	8月4日	8月9日	
南部	940	8月19日	8月25日	8月30日	9月5日	9月10日	9月16日	
中部	1,000	8月22日	8月27日	9月2日	9月7日	9月13日	9月18日	令和7年度の南部平坦の出穂期は7/26
平原	1,100	8月26日	8月31日	9月5日	9月11日	9月17日	9月23日	
平坦	1,200	8月29日	9月4日	9月10日	9月16日	9月22日	9月28日	

注) 8月11日までは丸森アメダスの令和7年のデータを使用。8月12日から9月5日は気象庁の1か月気温確率予測資料（地点：仙台、期間：8月9日～9月5日）から入手した平均気温予測値を基に、同期間中の丸森アメダスと仙台アメダスの平均気温平年値の差で補正したデータを使用。9月6日以降は、丸森アメダスの過去5年間の平均気温データを使用して算出した。

表5 出穂後の積算平均気温と出穂期毎の積算平均気温到達日の実績

地帯	積算平均気温 (°C)	出穂期						備考
		7月15日	7月20日	7月25日	7月30日	8月4日	8月9日	
南部	940	8月19日	8月24日	8月30日	9月4日	9月9日	9月15日	
中部	1,000	8月22日	8月27日	9月1日	9月7日	9月12日	9月17日	令和7年度の南部平坦の出穂期は7/26
平原	1,100	8月25日	8月30日	9月5日	9月11日	9月16日	9月22日	
平坦	1,200	8月29日	9月3日	9月9日	9月15日	9月21日	9月27日	

注1) 丸森アメダスの令和7年のデータを使用して算出した。

注2) 黄色塗りつぶしセルは、予測と実績が1日以内。

3 県全体の作柄

- 令和7年産水稻の作付面積（子実用）は6万8,000haで、前年産に比べ5,200ha増加。
- 主食用作付面積は6万5,300haで、前年産に比べ6,900ha増加。
- 水稻の10a当たり収量は525kg（作況単収指数：99）。
- 主食用の予測収穫量は34万2,800tで、前年産に比べ2万1,600t増加。

2等以下への主な格付け理由と
総検査数量に対する割合

- 形質：約3.3%
- 着色粒：約2.4%

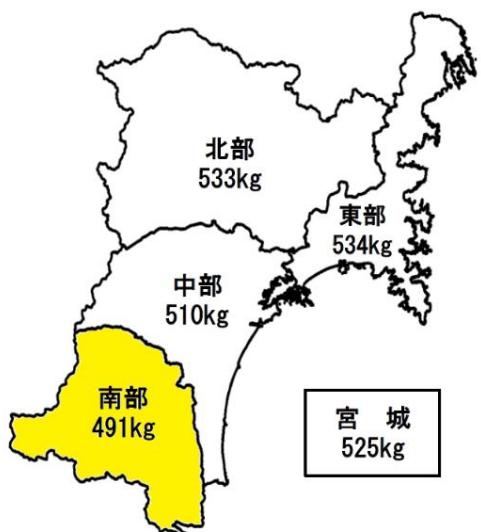


図3 地帯別の10a当たり収量

(1.90mmふるい目幅ベース)

(東北農政局令和7年12月12日公表)

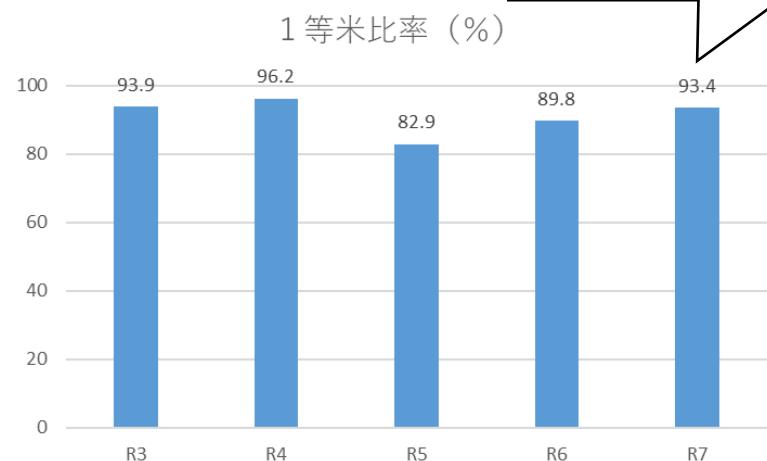


図4 宮城県におけるうるち玄米の1等米比率

(令和7年10月31日現在)※過去年度は各年同期の値。

(東北農政局令和7年11月28日公表)

4 品質低下の主要要因と主要品種の1等米比率

【気象】

令和7年度は、平年と比較すると高温で推移しましたが、記録的高温年であった令和5年度と比較すると登熟期間中の気温は低く推移しました。玄米品質に影響を与える出穂後20日間の平均気温は、7月20日頃に出穂した場合は27°Cを超ましたが、普及センターが実施した出穂状況調査では管内の出穂時期は概ね7月22日から8月4日の期間となっていたため、出穂が極端に早い一部のほ場やサニシキ等の高温に弱い品種を除き、高温による玄米品質への影響は少なかったと推測されます。

※水稻の高温障害は、出穂後20日間の平均気温が27°C以上の高温条件下で、背白米と基白米が多発すると報告されています(若松ら 2007)。

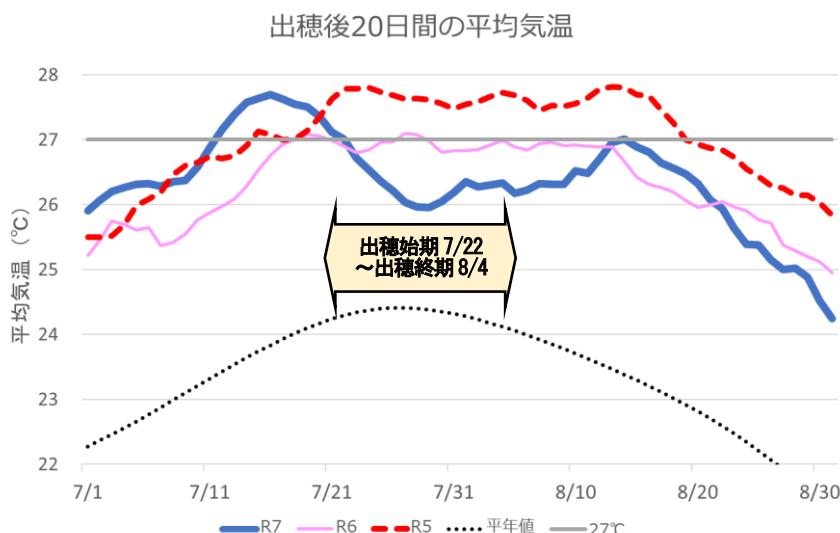


図5 出穂後20日間の平均気温（本年+令和5～6年、平年値）（丸森アメダス）

【斑点米カメムシ類】

6～8月にかけて平均気温が平年より高く推移したことから、アカスジカスミカメの越冬世代成虫及び第1世代成虫の発生盛期が平年よりやや早まりました。また、本田内にイヌホタルイやノビエなどアカスジカスミカメを誘引する雑草があり、カメムシ類の本田侵入が早まるとともに、本田での発生量が平年を上回ったものと推測されます。

仙南地域では、大型のクモヘリカメムシの発生が県内他地域と比べて非常に多く、斑点米被害粒率の増加に繋がりました（令和7年度宮城県水稻作柄検討会資料より）。

斑点米カメムシに対する防除対策としては、穂揃期とその7～10日後の2回の薬剤散布が有効ですが、防除回数が1回の場合や防除タイミングを逸した場合は、防除効果が不十分になったと考えられます。

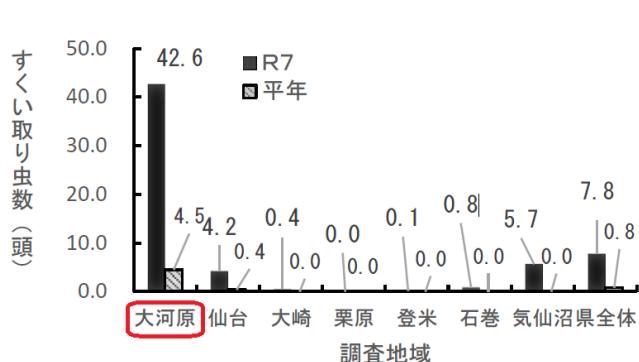


図6 クモヘリカメムシの地域別すくい取り虫数（8月中旬）
(令和7年宮城県病害虫防除所)

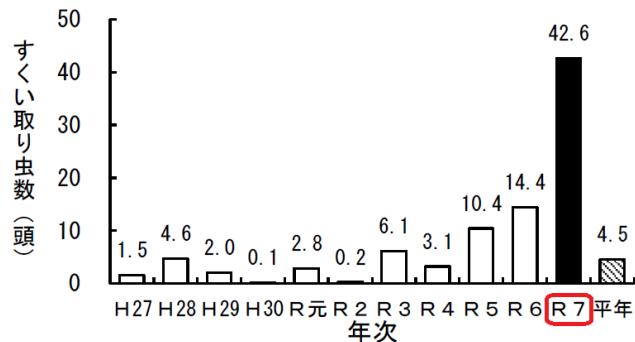


図7 クモヘリカメムシの大河原地域のすくい取り虫数の推移（8月中旬）
(令和7年宮城県病害虫防除所)

※令和7年度宮城県水稻作柄検討会資料より引用（図6、7）

【品種】

- 「ひとめぼれ」及び「つや姫」における2等以下への格付け理由は、斑点米カメムシによる部分着色が主なものとなりました。
- 「ササニシキ」の2等以下の格付け理由は、「充実度不足」が主なものとなりました。
- 「だて正夢」の1等米比率は約98%となりました。

表6 主要品種の1等米比率

品種	1等米比率 (%)		高温登熟耐性	管内における主な2等以下への格付け理由
	県全体	管内		
ひとめぼれ	96	84	中	部分着色（カメムシ）（61.7%）、腹白粒（15.3%）、充実度（13.5%）
つや姫	96	89	やや強	部分着色（カメムシ）（74.2%）、充実度（10.5%）、胴割粒（10.3%）
ササニシキ	74	44	弱	充実度（70.5%）、腹白粒（12.2%）、発芽粒（9.4%）
だて正夢	99	98	—	部分着色（カメムシ）（83.6%）、もみ混入（16.5%）
うるち玄米全体	93	84	—	部分着色（カメムシ）（56.4%）、充実度（16.9%）、腹白粒（10.9%）

注1) 県全体の数値は、令和7年10月31日現在（東北農政局令和7年11月28日公表）

注2) 管内の数値及び2等以下への格付け理由は、令和7年12月11日現在（JAみやぎ仙南より提供。加工用米等を含む）

注3) 高温登熟耐性は「東北地域における高温登熟耐性基準品種の選定」（梶ら 2016）による。

5 生育調査ほ・展示ほの調査結果

(1) 水稻生育調査ほ

- 生育期間中の高温多照により生育が進み、早生～中生品種では出穂期が平年よりも2～4日早くなりました。晚生品種（「つや姫」）の出穂期は平年並となりました。また、出穂期以降も高温が続いたため、成熟期は平年よりも1～5日早くなりました。
- 収量構成要素では、1穂粒数が平年よりも多い傾向が見られました。また、粒数が平年よりも多い傾向が一部で見られました。
- 昨年よりも出穂後の平均気温が下がったため、「ひとめぼれ」では整粒比が高くなりました。各品種で共通して、胴割粒がやや多くなりました。

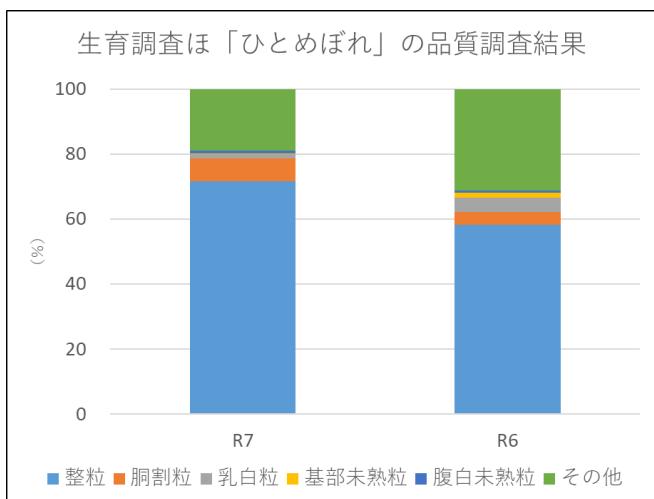


図8 生育調査ほ「ひとめぼれ」の品質調査結果

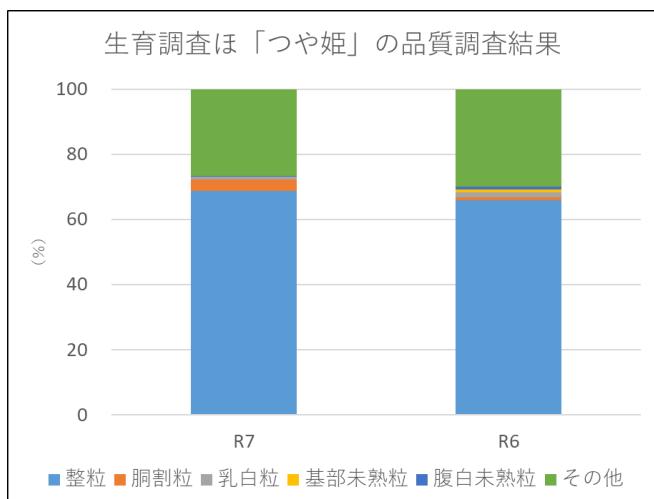


図9 生育調査ほ「つや姫」の品質調査結果

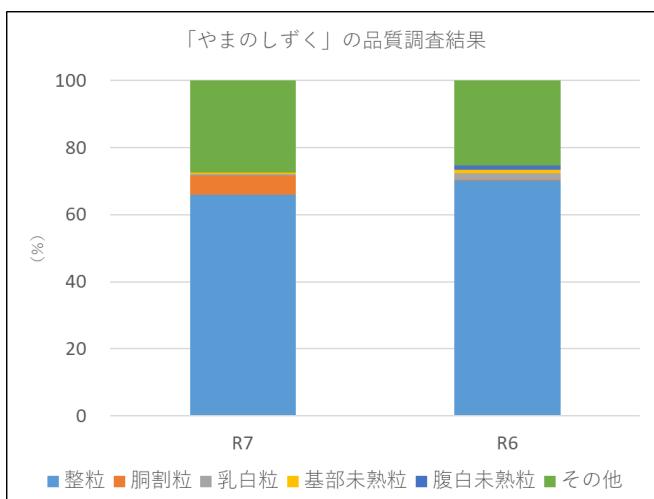
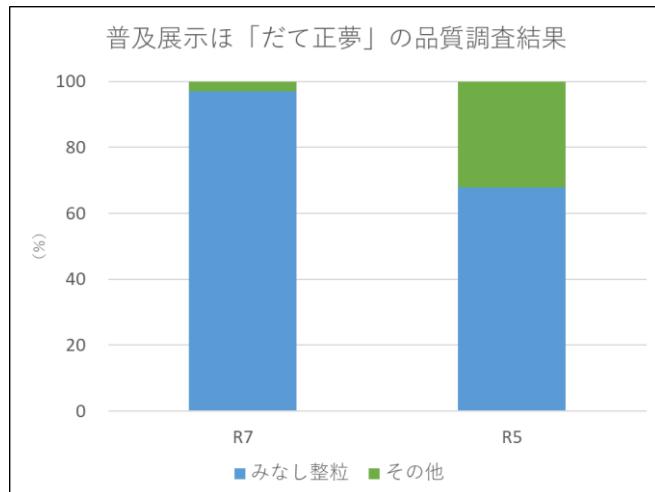


図10 「やまのしづく」の品質調査結果

- 注1) 図8～10 共に古川農業試験場における調査結果。穀粒判定機 RQI-100B (サタケ社) 使用。
- 注2) 図8は2か所の生育調査ほ(角田、白石)の平均結果。
- 注3) 図9は2か所の生育調査ほ(村田、角田)の平均結果。
- 注4) 図10は優良品種決定調査ほ(七ヶ宿)の結果。

(2) 「だて正夢」現地栽培技術普及展示ほ

- 生育期間中の高温多照により生育が進み、平年よりも4日早く出穂しました。
- 収量構成要素は概ね栽培ごよみの目安のとおりの結果となりました。
- 玄米品質は非常に良好な結果となりました。



注 1) 古川農業試験場における調査結果。穀粒判定機 RQI-100B (サタケ社) 使用。

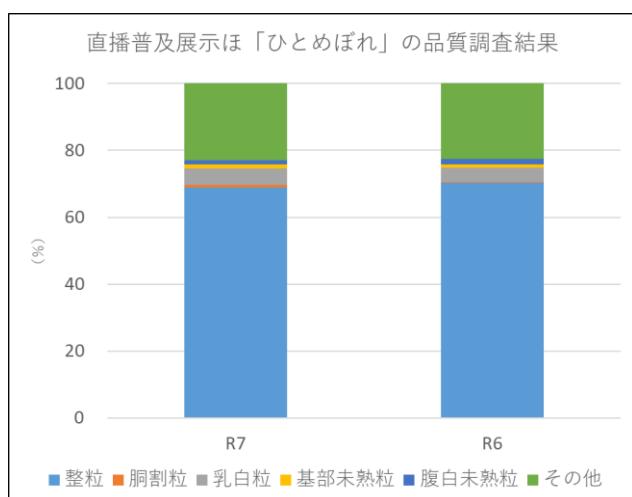
注 2) 普及展示ほ(角田)の平均結果。なお、前年度は展示ほを設置していないため、令和5年度の結果を比較として用いた。

注 3) みなし整粒は、整粒と白未熟粒、その他未熟粒の合計。

図 11 普及展示ほ「だて正夢」の品質調査結果

(3) 水稻直播普及展示ほ

- 生育期間中の高温多照により生育が進み、平年よりも3日早く出穂しました。また、出穂期以降も高温が続いたため、成熟期は平年よりも4日早くなりました。
- 穂数が平年よりも多く、登熟歩合は平年よりも低下しましたが、収量は平年並となりました。
- 生育期間後半に稈長が伸びた結果、倒伏が多くなりました。
- 玄米品質は昨年度とほぼ同等の結果となりました。



注 1) 古川農業試験場における調査結果。穀粒判定機 RQI-100B (サタケ社) 使用。

注 2) 普及展示ほ(蔵王)の結果。

図 12 直播普及展示ほ「ひとめぼれ」の品質調査結果

表7 生育調査ほ・展示ほ等の調査結果一覧

品種 (区分)	調査地点 (地帯区分)	田植月日 (播種月日)	出穂期	成熟期	収量構成要素						農産物検査結果 (古試実施)
					穗数 (本/m ²)	1 塊穂数 (粒)	粒数 (粒/m ³)	登熟歩合 (%)	玄米千粒重 (g)	精玄米重 1.9mm [≤] (kg/a)	
ひとめぼれ (生育調査)	角田市 (南部平坦)	5月13日 (1日早い)	7月25日 (2日早い)	9月2日 (2日早い)	408	84.5	34,434	76.4	22.4	58.9	1等下
ひとめぼれ (生育調査)	白石市 (西部丘陵)	5月19日 (3日遅い)	7月30日 (2日早い)	9月7日 (3日早い)	307	89.2	27,373	79.3	22.5	48.9	1等上
つや姫 (生育調査)	村田町 (南部平坦)	5月4日 (1日遅い)	8月3日 (同日)	9月11日 (1日早い)	332	86.4	28,722	62.6	20.6	37.1	3等中
つや姫 (生育調査)	角田市 (南部平坦)	5月23日 (1日遅い)	8月10日 (同日)	9月18日 (3日早い)	396	123.0	48,696	69.4	21.6	72.9	1等中
やまのしづく (優良品種決定調査)	七ヶ宿町 (山間高冷)	5月26日 (2日遅い)	7月30日 (4日早い)	9月9日 (5日早い)	419	-	-	97%	100%	139%	1等下～2等上
だて正夢 (展示)	角田市 (南部平坦)	5月6日 (1日遅い)	7月26日 (4日早い)	9月4日 (3日早い)	375	92.5	34,725	75.4	20.2	52.8	2等
ひとめぼれ (直播・展示)	蔵王町 (西部丘陵)	5月9日 (1日早い)	8月7日 (3日早い)	9月16日 (4日早い)	445	80.1	35,669	61.3	22.3	48.8	1等中

注1) 上段：本年値、下段：平年比・差の算出に用いた平年値は、過去5か年の平均値。

注2) 平年比・差の算出に用いた平年値は、前年度から調査場を変更しているため、平年比・差や前年比・差は参考。

注3) 白石市「ひとめぼれ」及び七ヶ宿町「やまのしづく」は前年度に調査を実施していないため、平年比・差の算出に用いた平年値は、令和元年～5年の平均値。

注4) 角田市「だて正夢」は前年度に調査を実施していないため、平年比・差の算出に用いた平年値は、令和元年～5年の平均値。

6 令和8年産の作付に向けた技術対策

- 斑点米カメムシ対策を徹底しましょう！
- 堆肥等を活用した土づくりを行いましょう！

(1) 秋耕（早期の耕うん）の実施と作土深の確保

- ・収穫作業の終了後、特にひこばえが大きいほ場では、できるだけ早めに稻わらと稻株をすき込むことが重要です。有機物を分解し、ケイ酸等を土壤中へ還元します。また、次作の代かきの際にわらの浮きを少なくすることができるので、作業の効率化にも繋がります。
- ・ただし、地下水位が高く透水性が悪い土壤では、すき込まれた稻わらの分解が遅れるため、稻わらを収集し、堆肥にしてから施用することが望ましいです。
- ・作土深は15cm程度を目標とし、毎年1cm程度ずつ作土深を深め、土づくりを加えながら良好で安定した作土を徐々に形成しましょう。

(2) 堆肥や土づくり肥料による土づくり

- ・作土中の土壤腐植は、概ね年間100kg/10aが分解され消失します。これは、完熟牛ふん堆肥1tの施用で補える量に相当するので、毎年の土づくりを行うことが必要です。
- ・堆肥を施用した土づくりを行うと、生育後半まで葉色が維持され、収量の向上を狙うことができます（ほ場毎の土壤分析結果に基づいた施肥設計が必要です）。

表8 堆肥の種類と効果

目的とする効果	種類	特徴
土づくり	牛ふん堆肥	カリ成分が高い
有機質肥料	豚ふん堆肥、鶏ふん堆肥	リン酸成分が高い

表9 土づくり肥料の種類と効果

種類	効果
ケイ酸質肥料	稲体健全化、耐倒伏性強化、登熟の向上、病害虫の軽減
リン酸質資材	低温時の活着や分けつの促進

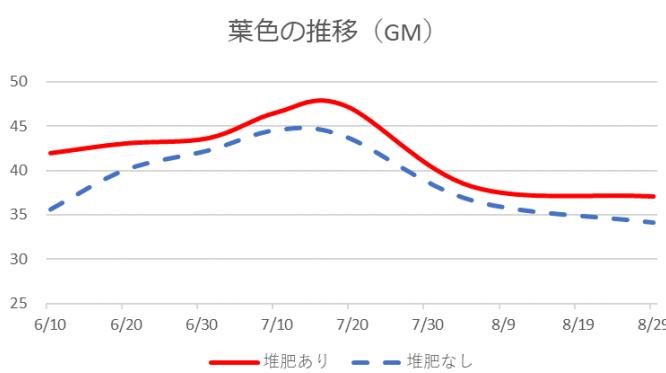


図13 堆肥散布の有無による葉色推移の差

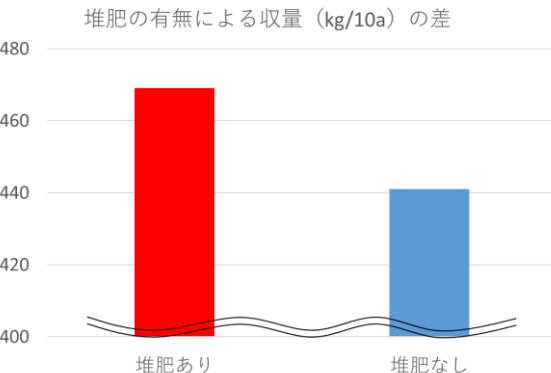


図14 堆肥散布の有無による収量の差

注1) 図13、14共に令和6年度に実施した豚ふん堆肥施用実証ほの結果（堆肥施用時期：令和7年2月頃）。

注2) 堆肥あり：豚ふん堆肥約200kg/10a+基肥40kg/10a、

堆肥なし：苦土重焼燐約20kg/10a+基肥40kg/10a



大河原管内の特殊肥料（たい肥）生産・販売業者一覧について

化成肥料の価格高騰により、多くの農業者の経済的な負担が増加しています。

このような状況下で持続可能な農業を実現するために、地域資源であるたい肥の有効活用による耕畜連携の更なる推進が重要と考え、特殊肥料（たい肥）生産・販売業者一覧表を作成しました。※一覧に掲載されている情報は令和7年12月1日現在のものです。

（3）晚期栽培と晚生品種、直播栽培の導入

- ・晚期栽培（平坦部稚苗の場合の移植時期：5月20～25日）の導入により、出穂期を8月中旬以降に遅らせることで、高温による品質低下の被害を軽減できる場合があります（その年の気象経過により、回避できない場合があります）。
- ・晚生品種の導入も高温を回避することで品質低下の軽減に繋がる場合があります。特に、「つや姫」のような高温耐性品種が有効です。
- ・直播栽培の導入により、移植栽培との作期分散・春作業の省力化を図ることができます。また、移植栽培よりも生育ステージが遅くなることから、高温による品質低下の被害の軽減や刈取の作業分散に繋がり易くなります。

（4）病害虫防除

イ) いもち病

- ・箱施用剤の施用が予防防除として有効です。高密度播種の場合は、10aあたりの箱数に応じて、1箱あたりの施用量が調整可能となります（適用拡大をした薬剤の場合）。農薬を使用する際は、使用基準を守って適切に使用してください。
- ・移植後の残苗は、いもち病の発生源になりやすいため、補植を行った後に速やかに処分しましょう（欠株は、2株以上連續しなければ収量に影響しません）。
- ・宮城県内では、真性抵抗性遺伝子 *Pib* に罹病可能ないもち病菌のレースの発生が確認されています。「だて正夢」や「げんきまる」もいもち病に感染するため、これらの品種を栽培する場合は、通常通りの防除が必要となります。

ロ) 斑点米カメムシ類



斑点米カメムシ類の防除対策

5～6月	7月	8月	9月
移植期 ← →		穗揃期 7～10日後	
● 水田内の雑草対策	● 畦畔・雑草地の草刈管理	● 牧草地の適正な刈り取り管理	● 薬剤防除（1回目） ● 薬剤防除（2回目）

※本県の主要種：アカスジカスミカメ

- ・水田内にヒエやイヌホタルイ等の雑草があると、出穂前でもカメムシ類を水田に呼び寄せてしまうため、防除を徹底しましょう。
- ・水田周辺のイネ科雑草の刈取りは、水稻の出穂前15～10日までに終わらせましょう。
- ・薬剤防除は、穂揃期とその7～10日後の2回防除が基本です。
- ・近年、県南では大型で口器が強い「クモヘリカメムシ」の発生が多く確認されています。



表10 斑点米カメムシ類の比較

種類	体長
クモヘリカメムシ	15~17 mm
アカスジカスミカメ	4.6~6 mm

※クモヘリカメムシ

※アカスジカスミカメ及びクモヘリカメムシの写真は、県病害虫防除所 HP より引用。

ハ) イネカメムシ



※イネカメムシ

- ・令和5年度以降、福島県内でイネカメムシの発生が確認されています。イネカメムシは、斑点米や不稔による減収の被害を生じさせます。
- ・イネカメムシの体長は 12~13 mm程度です。イネカメムシや形状がよく似たカメムシを見つけた場合は、大河原農業改良普及センター や 県病害虫防除所へ情報提供をお願いします。

大河原農業改良普及センター先進技術第一班 TEL: 0224-53-3496
病害虫防除所予察班 TEL: 022-275-8982

特集 令和8年産以降の高温に向けて

令和7年度は出穂後 20 日間の気温がやや落ちていたこともあり、玄米品質への影響は限定的となりましたが、過去の高温年と同様に生育期間中の気温は高くなりました。今後も玄米品質だけでなく、様々な影響が懸念されるため、近年の温暖化に対応した稻作を行うことが大切です。

稻作に特効薬はありません。できる対策を積み重ね、改善を継続していくことが重要です。

(1) 基本技術の徹底

- ・「6 令和8年産の作付に向けた技術対策」で示した基本技術を実施して稻体を強く維持することにより、高温条件下でも品質低下の影響を軽減することができます。
- ・特に、堆肥や土づくり肥料の施用による土づくりが効果的です。
- ・近年の春～秋の高温傾向にも対策が必要です。温暖化への対策を行いましょう。

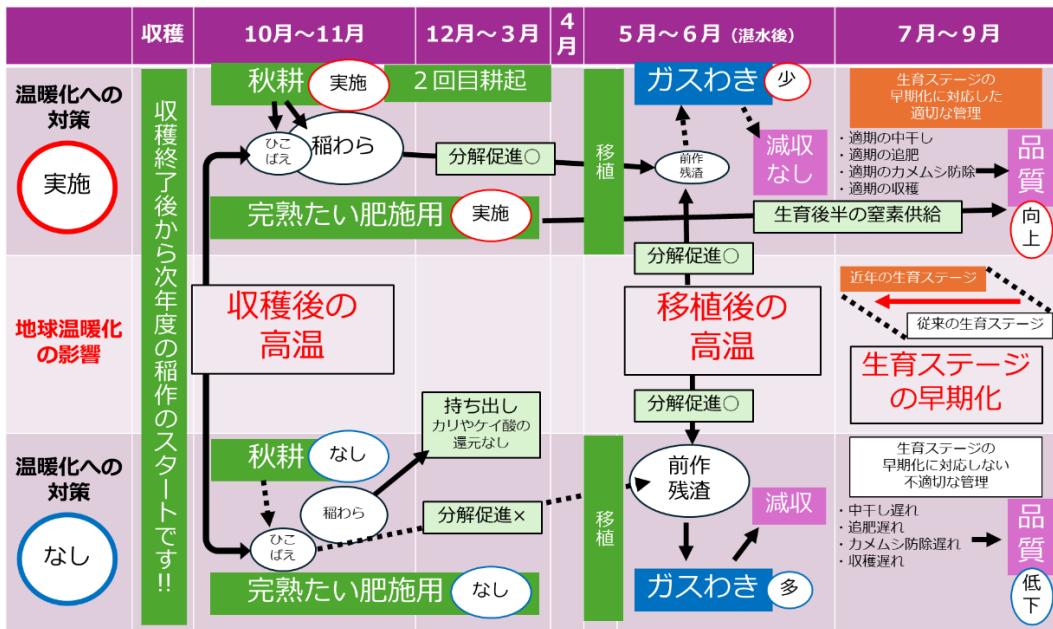


図 15 地球温暖化の影響と対策

(2) 水管理

- 出穂後の20日間で最低気温が23°C以上となる異常高温が連続するような場合、乳白粒などの「白未熟粒」が発生し易くなります。
- 高温が予想される場合は、品質低下を少しでも防ぐため、「飽水管理※」を行い、土壌を常に湿潤状態で保ちましょう（出穂後30日頃まで）。

※飽水管理の方法

- ①水戻を閉め、畦畔からの漏水が無いか確認する。
- ②田面が浸るくらい（ひたひた）に水を入れる。
- ③水を止めたら水戻を閉めたまま、自然減水させる。
- ④水田の足跡に水が無くなる頃、または番水のタイミングで次の水を入れる（目安は3～5日おき）。

【注意】フェーン現象等の異常高温の発生の恐れがあるときは、速やかにかん水し、ほ場が乾かないようにしてください。土壌表面に水がない状態でフェーン現象に遭遇すると、不穏や品質低下の危険性が高まります。

◎飽水管理は、地温の上昇を抑制し、白未熟粒の発生を抑制できます。

(3) 適期刈取り

- 出穂期からの日数は、最も簡単な刈取適期の目安になりますが、気象条件等が平年並みに推移した場合の積算気温から算出しているため、出穂後に高温が継続する年は刈取適期までの日数は早まります。
- そのため、経験に基づいた『「ひとめぼれ」は出穂後40日後に収穫する』ような方法は、刈取適期を逃す可能性があり、玄米品質の低下に繋がりかねません。
- 特に高温年では、収穫期の目安を『出穂後の積算平均気温』で予想しつつ、ほ場観察により粒の黄化程度を見て判定することで、適期刈取りに繋げることが重要となります。

表 11 仙南地域の主力品種の収穫適期

品種	刈取適期（出穂後の積算平均気温）
ひとめぼれ	940～1,100°C
つや姫	1,000～1,200°C

- 仙南地域の主力品種である「つや姫」は、出穂後1,200°Cを超えると茶米の発生が多くなるため、適期刈取りには細心の注意が必要です。